

2024(令和6)年度

甲南女子大学

教育実習・合格体験記集

甲南女子大学 教職支援課

目 次

1-1. 各種体験記（総合子ども学科-幼稚園課程、小学校課程、保育課程）

- ◇ 幼稚園教育実習 感想文 総合子ども学科 伊藤 里菜..... 2
- ◇ 幼稚園教育実習 感想文 総合子ども学科 河野 心菜..... 3
- ◇ 小学校教育実習 感想文 総合子ども学科 榊 星音..... 4
- ◇ 小学校教育実習 感想文 総合子ども学科 廣嶋 愛華..... 5
- ◇ 合格体験記（幼稚園） 総合子ども学科 高畑 怜佳..... 6
- ◇ 合格体験記（小学校） 総合子ども学科 長谷川 桃花..... 7

1-2. 各種体験記（日本語日本文化学科・国際英語学科-中高課程）

- ◇ 中学校教育実習 感想文 日本語日本文化学科 松村 美咲..... 8
- ◇ 中学校教育実習 感想文 国際英語学科 眞田 伶華..... 9
- ◇ 中学校教育実習 合格体験記 日本語日本文化学科 大西 和好..... 10

1-3. 介護等体験記

- ◇ 特別支援学校における介護等体験の感想とまとめ
 - 日本語日本文化学科 関 ひかり..... 11
 - 総合子ども学科 有川 可奈恵..... 12

1-4. 各種体験記（医療栄養学科-栄養教諭課程）

- ◇ 栄養教育実習 感想文 医療栄養学科 古谷 百花..... 13

1-5. 各種体験記（看護学科-養護教諭課程）

- ◇ 目指す養護教諭像と学校で求められる力について
～教職科目・養護専門科目・養護実習・教職実践演習から総合的に振り返る～
 - 看護学科 古野 ひなた..... 14
 - 看護学科 山岡 美夢..... 16
- ◇ 養護実習実践発表会「養護実習を終えて」看護学科 山崎 あみ..... 18

1-1. 各種体験記（総合子ども学科-幼稚園課程、小学校課程、保育課程）

幼稚園教育実習 感想文

総合子ども学科 伊藤 里菜

私は母園である公立幼稚園の4歳児クラスで実習をさせていただきました。母園ということもあり懐かしさを感じて胸が躍る反面、子どもたちと信頼関係を築いていくことができるのだろうかと不安を抱く中で始まった実習でしたが、3歳児・4歳児・5歳児のクラスがそれぞれ1クラスずつある小規模園だからこそその子どもに寄り添った保育者の丁寧な関わりを目にし、子ども1人ひとりの発達や個性を把握して関わることの大切さを身に染みて感じる事ができた1か月間となりました。実習を通して学んだことの中でも特に印象に残ったことを述べたいと思います。

まず、言葉掛けが子どもに与える影響です。私は約1か月間の教育実習の中で、子どもたちが「自分でする」という経験を積み重ねていくことができるようにどこまで援助していくのかという点で何度も悩みました。そこで先生方の子どもたちに対する言葉掛けに注目して観察すると、片づけをする時間になったときにだけ言葉を掛けるのではなく「時計の針が○になったらお片付けをするよ」と事前に呼び掛けていることに気が付きました。言葉掛けに対する子どもたちの反応にも着目すると、保育者の言葉が耳に入るとすぐに時計を見て確認し、時間が来たことに気が付くと自ら片づけに移る姿がありました。このように保育者の掛ける言葉やそのタイミングが、子ども自身が見通しを持って行動する自律性を育む支援に繋がることを学びました。

次に、視覚支援の重要さです。4歳児クラスでは五十音順で振られている番号のシールを机に貼っていました。目印を付けるという工夫によって、自分がどこに座ると良いのか子どもたちが自身の目で見て理解することができるということに気が付きました。また、登園から降園までの予定をボードに記載して子どもたちが1日の流れを確認できるようにしていて、これらの視覚支援が「自分の居場所がある」「今日は1日どんな活動をするのか知ることができる」という安心感に繋がる重要な援助であることを学びました。この学びより「安心して楽しめる遊び」を自身の軸として、トンボを作るという研究保育の準備・実践を行いました。製作を進めるにあたって手順が目に見えることで子どもに安心感をもたらすことができると考え、紙に手順を書いてボードに貼り付けるという環境構成を行ったのですが、反省会の際に先生方から「字を読めない子どももいる」というご指摘をいただき、ただ視覚支援を行うだけでなく子どもの発達段階に合わせた適切な視覚支援が肝心だということを実感しました。

この度の実習を通して、幼稚園教諭という職業の素晴らしさややりがいやを改めて感じるとともに、自身の課題も多く明らかになりました。その中で、先生方が「教材研究や準備がしっかりできていて先生に向いているよ」「温かい眼差しや関わりは子どもたちにとって安心感となっていたよ」などのお褒めの言葉を掛けてくださり、得た知識を基に教材製作をしたり、子どもと同じ目線になるという点を常に意識した関わりは子どもたちにしっかりと届いていたのかもしれないと自分に自信を持てるようになりました。この実習での学びや思い出は一生忘れません。ただ子どもの顔を見るだけでなく目線の高さを同じにする、ただ遊ぶ様子を観察するだけでなく声を掛けてコミュニケーションをとる、当たり前になってしまうことを改めて意識し続けることを忘れずに、自分の良かった点や改善点をしっかりと振り返りながら、この度の経験を糧に今後も成長できるように学び続けていきたいと思っています。

幼稚園教育実習 感想文

総合子ども学科 河野 心菜

私は幼稚園実習の約一か月間を経て、将来保育者になる上で大切なことを沢山学ばせて頂き、また、子どもと関わるお仕事がどんなにも素敵で、やりがいのあるものか実感することが出来ました。

今回、私は私立の幼稚園に行かせて頂きました。実習園は、満三歳児クラス、年少、年中、年長クラスに分かれており、私は年少クラスを担当しました。普段は音楽に触れ合う時間が多く、部分実習や半日実習では弾き歌いや新しい曲の歌入れ、ピアノを使った律動などを積極的に行わせて頂きました。他にも手遊び、読み聞かせ、製作、ゲーム活動なども沢山実践させて頂き、その分、楽しい事だけでなく、自分のまだまだ足りない実力を実感するばかりで、心が折れそうになる時もありました。そんな時、「せんせい、たのしかったよ」「せんせいだいすき」という、子ども達からのまっすぐな言葉が私の支えとなり、「頑張らないと」と思えるきっかけにもなっていました。実習中に子ども達から貰った言葉は今後もきっと忘れることは無いと思います。

今回の実習で、何事も「経験」することが大切だということを学びました。これは、自分自身が感じただけでなく、最終日に担任の先生から頂いた言葉でもあります。子どもの動きは基本的に想定外な為、どれだけ練習を重ねていても、いざ実践するとイレギュラーなことが起こることがほとんどです。そんな時、どれだけ臨機応変に対応できるよう努力するか、また、思ったように事が進まなくても、その出来事をきちんと持ち帰って納得するまで反省するかが、保育者としてのスキルを上げる大切な過程であると実感しました。慣れない製作・ゲーム活動・ピアノや、笑顔いっぱいで行う手遊び、声の強弱をつけた読み聞かせなども、全て保育者になる上で避けてはならない「経験」であり、そして、その「経験」に対する反省を経て、強くて素晴らしい保育者になるのではないかと、私は感じました。

幼稚園実習の約一か月間は、数々の学びを得ることが出来たことはもちろん、何よりも、子ども達と関わるのがとても楽しく、私にとって癒しの時間であり、毎日子ども達と会うことが本当に楽しみでした。実習記録や指導案の作成は想像以上に大変で、毎日ピアノの練習をしたり、手遊びを覚えたりしていると、自分の時間はほとんど取ることが出来ない大変な毎日でしたが、心から大好きと思える子ども達の笑顔を想像しながら必死に駆け抜けた約一か月間は、今後忘れることのない、大切な時間になりました。子ども達と練習を共にした運動会、歌の発表会、お弁当の時間、昼食後に他学年の子どもとも交えて園庭で遊んだ時間、虫取りをした時間、優しい部分だけでなく子どもと向き合ってきたちゃんと良し悪しを伝えた時間、たった一か月間でも子どもの成長を実感することが出来た時間など、子ども達と過ごしたかけがえのない全ての時間が幸せでした。今回の幼稚園実習で学んだことを胸に刻み、理想の保育者となれるよう、これからも精進していきたいです。

小学校教育実習 感想文

総合子ども学科 榊 星音

小学校教育実習は、1か月という短い期間でしたが、濃く充実した日々を過ごすことができました。教師という職業の素晴らしさを身近に感じ、教師になりたいという思いがより一層強くなりました。

私は3年生のクラスを担当させていただきました。実習前は始まるのが凄く楽しみである反面、私に務まるのだろうか、上手に授業ができるだろうか、子どもたちと仲良くできるだろうかと正直不安な気持ちの方が大きかったです。しかし、いざ実習が始まると不安だった思いは消え、子どもたちや先生方に支えていただき、楽しく充実した日々を送ることができました。

私が実習中に心掛けたことは、何事にも挑戦をすること、先生方をよく観察し知識や技術を取り込むこと、何でも積極的に学ぼうとする姿勢を持つこと、具体的な目標を1日1つ立て目標を立て達成すること、今後活かせるよう細かくノートに記録することでした。その中でも、大学の授業で教わった、細かくノートに記録することはとても効果的であったと思います。自己の授業記録・教材研究の記録を細かく取り、数冊の「PDCA サイクルノート」を作成しました。自分自身の授業を振り返り、見直し、改善することで、4週間の中で大きく成長できました。また、1日1つの目標を達成することも自身の成長を促しました。ただ漫然と実習期間を過ごすのではなく、日々明確な目標を立て、徐々にハードルを上げることで意欲的に取り組むことができました。

先生方からたくさんの師範授業を見させていただき、その中で子どもたちへの接し方や場面に応じた声掛けの仕方、学習進度に合わせた支援のあり方、ICTの効果的な取り入れ方、児童の小さな発言をしっかりとキャッチすることの大切さなどを学びました。学級により特色がありますが、一貫して丁寧で愛のある学級経営・授業をされているということが伝わってきて、私も子どもたちとこんなクラスや授業を作りたいと思いました。

授業をする中で、同じ授業を受けていても個々に理解度が異なるので、噛み砕いて分かりやすく説明する方法を考えたり、児童の発言を端的に分かりやすく復唱を行って確認したりすることが必要であり、それらにより児童の理解度だけではなく興味や関心も変わるので、教師の1つ1つの発言は児童への影響力が大きく、大切にすべき部分だと感じました。また、何故そう考えたのか、どこからそう思ったのかと問い返すことでより考えを深めることができ、また対話する授業ができると学びました。私は、1対1の授業になってしまうことが多く、全員と対話する授業を行うべきだと指導をしていただき、発表者だけではなくクラス全員に問い返すということを工夫しました。また、少時的を外れた意見が返ってくることもありますが、全て取り入れて全員で考えることでどの児童も取りこぼさない学級経営・授業づくりに繋がると学びました。

教育実習を経て、教える側の立場になって過ごす学校生活は戸惑うことも多くあり、毎日が失敗だらけで自分の至らなさを感じる中、優しく元気な子どもたちに助けをもらい、教師になりたいという思いがより一層増しました。最終日、校長先生からの「きっと良い先生になるよ、待ってるね。」という言葉は、私の宝物です。実習での経験を糧にこれから活かしていきたいと思っています。

小学校教育実習 感想文

総合子ども学科 廣嶋 愛華

小学校教育実習は授業の仕方や学年ごとの子どもの接し方など多くの学びを得ることができ、成長できた4週間でした。実際に学校現場に行くことで教師という職業の良さ、大切さを実感することができました。

私は4年生のクラスを担当させていただきました。最初は子どもたちと共に学校生活を送ることを楽しみにしていたと同時にしっかり授業が行えるのか、子どもたちとどのように関わると良いのか分からず、不安でした。しかし、実習が始まり、子どもたちと関わる中で不安がなくなり、学びが多い充実した4週間になりました。

教育実習中に特に意識したことは積極的に子どもたちと関わることです。担当クラスの子どもたちは積極的な子が多く、子どもたちから話に来てくれることが多かったため、初めは私から話しかけることが少なかったです。そこで自分から積極的に話し、より子どもとの関わりを増やしたいと思い、担当の先生に相談しました。その際に「1日1回はクラスの子もたちと話すこと」を目標にしているとお聞きしました。非常に大切なことだと思い、私自身もこれを目標として、登下校時、休み時間、机間指導などで全員と話そうと意識しました。それにより、自分から話すことが苦手な子どもと積極的に関わることができ、一人一人の性格や好きな遊び、苦手な教科など多くのことを知ることができました。また、他クラス、他学年の子どもとの関わりを増やすことができ、子どもに合った関わり方を学ぶことができました。

授業では国語、算数、理科など様々な教科の授業をさせていただきました。授業を行う中で時間配分が大切だと感じました。初めは作成した指導案通りに授業が進まず、授業が遅れてしまうことがありました。そこでノートに一つ一つの活動の目安時間を書き、授業中に時計を見て時間を意識しながら授業を行ないました。しかし、時間通りに授業が終われなかったため、そのことを先生方に相談しました。その際、「一番時間をかけたい活動を考えよう」とアドバイスをもらい、授業内で軸となる活動に時間をかけ、他の活動はスムーズに行えるように意識しました。その結果、時間通りに授業を行なえるようになり、授業力を上げることができました。

教育実習最終日には子どもたちが「ありがとうの会」を開いてくれ、折り紙や手紙などのプレゼントをもらいました。手紙には授業中や休み時間の思い出や感謝が書かれており、とても感動し、4週間頑張ってきて本当に良かったと感じました。

教育実習を通じて、授業作りの大変さ、子どもとの関わり方、学校での子どもの様子など多くのことを学びました。教師は子どもの成長を身近に感じられる素晴らしい職業だと感じ、より教師になりたいという気持ちが強くなりました。この貴重な経験を今後の将来に活かしていきます。

合格体験記

幼稚園教諭一種免許状・保育士資格取得
総合子ども学科 高畑 怜佳

今春より、大阪府内にある私立の幼稚園型認定こども園に就職します。

幼少期の頃、幼稚園に対して楽しかった記憶があり、何よりも担当教諭が好きだったことが大きく、私も「先生みたいになりたい」という気持ちから、幼稚園教諭になる夢を抱きました。甲南女子大学へ入学し、保育園や施設、幼稚園での実習を経て、「幼稚園教諭」にこだわるのではなく、教育方針に共感出来る園に就職することが何よりも重要であることを体感しました。

この気づきを踏まえ、4月から始めた就職活動では、2つのことを心掛けました。1つ目に、就職フェアは一度に様々な園を知る貴重な機会である為、通勤が可能な範囲の園のブースは積極的に訪れることです。事前に園の所在を検索し、多めに目星をつけた状態で参加していました。2つ目は、園ごとに同様の質問をさせて頂くことです。同様の質問を行っても、教育方針の違いから園ごとに回答が異なる為、自分に適した考えの園を知ることが出来ました。

実際に私は、教育方針に共感出来る園に就職フェアで出会い、見学に数園訪れました。見学を通して子どもと関わっている保育者の姿を間近にし、その取り組みに興味を抱いた園に出会い、採用試験を受けるに至りました。ご縁を頂き、第一に希望していた園で採用が決まりましたが、園により大幅に採用試験の日程が異なる為、焦る気持ちもありました。結果として、希望する園を諦めず、挑戦して良かったと感じています。

採用試験の内容については、「個人面接」「部分実習」「集団討論」「筆記試験」でした。部分実習では、自分が得意なことを準備するよう事前に周知されていた為、自己紹介と歌遊びをスケッチブックシアターで行いました。クイズ形式にする等、子どもが飽きずに楽しめるよう工夫した為、子どもと共に取り組み、心強かったことを覚えています。集団討論では、提示されたテーマに基づき、時間内に考えをまとめ、保育者の皆様に発表する時間が設けられていました。筆記試験は、その場で内容を知る形で行われ、「就職後大切にしたい自分自身の保育者像に対する考えを論述」「保育者になったことを想定し、園をアピールするポスターを作成」といったものでした。

採用試験の対策としては、個人面接が最も考えを伝えられる時間である為、園の惹かれた部分や保育についての自分自身の考えを言語化する練習を何度も行いました。一言一句覚えるのではなく、重視したい部分が自然と出てくるのが大切だと感じました。

就職活動を行う中で、自信を失う場面や周囲と比較する等、悲観的になることもあると思います。ですが、将来の自分自身の姿は誰にも予知出来ないので、気負いすぎずに今の私が進みたい道を選ぶことが何より大切だと考えます。

上記で述べた内容は、私の経験に過ぎませんが、興味を抱き、拝読頂いた方の参考になることを願います。

最後になりますが、就職活動を始め、大学生活を通して携わって頂いた甲南女子大学の先生方と職員の方々に感謝しております。有り難うございました。

合格体験記

幼稚園教諭一種免許状・小学校教諭一種免許状取得
総合子ども学科 長谷川 桃花

私は、小学4年生の頃から小学校の先生になりたい気持ちがありました。その夢が叶い、今年の春からは自身の生まれ育った神戸市で小学校教諭として勤務することになりました。

私が教員採用試験に合格することができたのは、甲南女子大学で出会った友人、先生方、そして家族の支えがあったからです。

教員採用試験対策を本格的に始めたのは、3年生の春休みです。それまでの大学生活では、日々の授業を大切にし、教員として必要な知識を身につけることに集中しました。また、受験を考えている自治体の試験内容や傾向、教育時事などを日頃から意識して調べることを心がけて過ごしていました。3年生の春休みからは、教員採用試験での面接、模擬授業、場面对応等の練習を友人や先生方と行い、改善点を教えていただくことを繰り返しました。また、面接等の練習を始めた当初は緊張してしまい、自信がありませんでした。ですが、大学での教員採用試験対策に取り組み続けたことで、少しずつ自分の言葉で話せるようになり、自信に繋がっていきました。そして、教員採用試験本番では、自分らしさを出すことができ、合格をいただきました。

私が教員採用試験に合格するまで、本当に様々な方に支えられてきたことを実感しています。その中でも、甲南女子大学の先生方には手厚い支援をしていただきました。教員採用試験に向けて、最後まで諦めずに仲間と取り組んだ日々は、これからの人生でも忘れられない大切なものになりました。4月から教員になることには期待と不安がありますが、日々精進していきたいと思います。これまで私に関わってくださった全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

1-2. 各種体験記（日本語日本文化学科・国際英語学科-中高課程）

中学校教育実習 感想文

日本語日本文化学科 松村 美咲

私は母校の中学校へ教育実習に行きました。恩師が中学校の先生で、私も中学校教員を志しているため実習先として中学校を選びました。

私が実習中に特に気を付けたことは、3つあります。

1つ目は、積極的に生徒に関わるという事です。私は元々、積極的に関わるのが得意なタイプではありませんが、1か月という短い期間で生徒と打ち解け、生徒の事を知るためにはこまめな声掛けが必須であると考えました。学校全体で大人しい生徒が多かったこともあり、どのように声掛けしてアプローチしていくかが難しかったです。休み時間や放課後などでじっくり関わった生徒が最終日に『先生頑張ってや。文化祭も見に来てな。もしも、教師になられへんかったらクラス全員からタイキックやで。』と応援してくれた時は、一か月頑張った良かったなと思いました。

2つ目は、教科担当の先生に直ぐに聞きに行くという事です。教科担当の先生は常にお忙しそうでした。ただ、それでも何もわからないため、聞くべきことは山積みです。教育実習中に授業を任される回数は教科担当の先生や学校の方針によって異なるそうです。私の教科担当の先生や学校の方針は“たくさん行うにこしたことはない”というもので、私は7クラスの4時間分で28コマと担当クラスの道徳1時間で計29回授業を行いました。そのため、毎日反省があり、授業資料や進め方を変えていました。授業教案は4時間分初日に提出したのですが、4時間目の教案は丸々新しいものになりました。先生が席を外されているときは付箋を置いて、お忙しいときは空き教室で出来ることをして、質問のチャンスを待ちました。先生に聞きに行かなければ授業を無事終えることは難しかったと思います。

3つ目は、無理をしないことです。教育実習中は右も左もわかりません。授業はあまり上手にできません。そして、教材研究に上限はありません。たった1か月ですが、ずっと夜遅くまで学校に残り、家でも教材研究をして、朝早く学校に行き…という生活では体が持ちません。土日はしっかり休んで、担当の先生が出張にいらっしゃっている日は自分も少し早めに帰るようにしていました。教師は体力勝負と言いますが、休める時にしっかり休み自分の体調管理を行うことも大切であると感じます。

教育実習の1か月はあっという間でしたが、教師のやりがいを改めて感じ、教師になりたいという気持ちがさらに強まりました。実習後に実習生と話しましたが、全員、「大変だったけれども楽しかった」と言っていました。良い実習になったのは、甲南女子大学の先生方のアドバイスや入念な準備、良い先生と生徒に恵まれたからだと思います。4月からも、この思い出を胸に教壇に立ちたいと思います。ありがとうございました。

中学校教育実習 感想文

国際英語学科 眞田 伶華

私は母校の中学校で 3 週間教育実習を行いました。実習が始まる前は不安でいっぱいでしたが、毎日とても充実していて本当に楽しい実習になりました。

初日は非常に緊張していましたが、先生方や生徒たちが温かく迎えてくださり安心して本当に嬉しかったです。1 週目は授業見学がメインでした。2 年生の授業を中心に様々な授業を見学させていただきました。実際の教育現場でどのような授業を行っているのか、授業中の生徒の様子を知ることができたので、指導案を作るにあたって非常に重要な 1 週目でした。

2 週目からは実際に指導案を作成して、教壇に立って授業を行いました。大学での模擬授業と実際の教育現場での授業の環境や方法などの違いが大きく、自分の未熟さを痛感し悔しい思いをしました。しかし、担当教員のアドバイスと生徒の存在のおかげで頑張ろうという気持ちになれました。

3 週目になると、生徒と良い関係を築くことができ、自分の担当クラス以外の生徒とも休み時間に話したりするなど楽しい時間を過ごせました。授業でもクラスによって進むスピードを変えたり、どうすれば生徒が主体的に活動でき、分かりやすい授業を行えるのか、最初の頃に比べると生徒に寄り添った授業を作ることを意識していました。どの生徒も一生懸命授業に取り組んでくれるので、私も生徒のために一生懸命授業を行いました。

私は実習最終日に研究授業を行いました。多くの先生方に授業を見ていただくという機会では不安と緊張で押しつぶされそうでした。しかし、生徒たちが「先生なら大丈夫！」や「先生のために頑張る！」などと声をかけてくれて、緊張がやわらぎ楽しい授業にしようと思えることができました。また、生徒も今までで 1 番活発に発言してくれて本当に助けられたし、何より生徒のおかげで今までやってきたどの授業より 1 番楽しく授業ができました。

教育実習を楽しく行うことができたのは、間違いなく生徒のおかげだと思います。研究授業も無事に終わり、最後に私のためにゲームやお手紙を用意してくれて本当に嬉しかったし頑張って良かったと思いました。指導案作成や日誌などで時間に追われて本当に大変な毎日でくじけそうな時もあったけれど、多くの生徒から「先生の授業分かりやすいからずっとやってほしい！」や「先生ずっと学校にいて欲しい！」と言われて、積極的に生徒とたくさんコミュニケーションを取ってきて良かったなど心から思いました。

この 3 週間で教師の在り方や実際の教育現場について学ぶことができ、生徒と先生方に支えていただき、素晴らしい経験をさせてもらい大きく成長することができました。この経験を活かしてこれから社会人として頑張っていきたいと思います。

合格体験記

中学教諭一種免許状（国語）・高等学校教諭一種免許状（国語）取得
日本語日本文化学科 大西 和好

私は、大学等推薦区分で神戸市の中学校・高等学校を受験し、この春から教員として働きます。元々、高校生の頃に「教員を自分の一つの進路にしたい」と考えたことをきっかけに甲南女子大学に進学しましたが、最終的に教員を進路に決めたのは、大学4年生の直前でした。それまで就職活動も行っていたため、本格的に勉強を始めたタイミングは随分遅かったですが、家族や共に教員採用試験に挑む仲間、熱心に指導してくださる先生方など多くの方々の支えのもと、合格することができました。

私が大学に入学した頃は、新型コロナウイルス流行の影響で、思い描いていた大学生活を送ることがままなりません。しかし、感染対策に留意しながら一般の吹奏楽団の活動への参加や、子どもたちとインターネットの関わり方を考える研究会への所属、Teacher's Caféへの参加など、「新しいコミュニティに身を置き新しい知見を得ること」を意識しました。オンライン“だからこそ”できる外との交流を図りながらコロナ渦を言い訳にしないことをモットーに、積極的に活動することを心がけていました。

大学3年生からは大学の勉強はもちろん、就職活動とも並行しながら、本格的な情報モラル出前授業の実施、中学校での特別支援ボランティアの活動、代表として吹奏楽団の運営に携わることなどに注力しました。集団を指揮する立場に身を置くことでアプローチや話し方を学ぶことができ、実際に学校現場で経験を踏めたことで「教員になりたい」という想いが強くなったことで本格的に教員を目指すようになりました。

教員採用試験の一環である筆記試験を迎えるまで、平日は欠かさず大学で過去問題や参考書などを繰り返し解くことに力を注ぎました。環境を変えることで気持ちも切り替えやすく、移動時間のアプリやYouTube視聴など、隙間時間を活用した勉強にも取り組むことができました。また、Teacher's Caféで異なる自治体を受験する仲間や先生方と面接や集団討論を行い、様々なパターンを想定しながら練習することができました。

中学生の頃から吹奏楽一筋の学生生活を送ってきた私にとっては、教員採用試験が人生の中で最も勉強した時間で、勉強法に迷ったことや心が折れそうになったこともありました。しかし、周りのサポートや紆余曲折を経てたどりついた「教員になりたい！」という想いに支えられ、合格を掴むことができました。

この合格体験記が、教員を少しでも志す方のひとつの例になれば幸いです。

1-3. 介護等体験記

介護等体験の感想とまとめ

日本語日本文化学科 関 ひかり

私は、知的障害部門、中等部のクラスにお世話になりました。2日間、実際の学校現場を直接肌で感じたことで、沢山の気づきや学びを得ることができました。短い期間ではありましたが、生徒や教師の方々との関わりや、学校生活の観察などから吸収することは多く、とても貴重な体験であったと実感しています。中でも印象に残ったことは、大きく分けて2つあります。

1つ目は、普通学校と、特別支援学校の違いを実感したということです。特に、授業の実施方法は、一般学校と大きく異なっていました。各授業で生徒は、クラスごとではなく、個人の学習や発達段階に合わせて、教科ごとに違うメンバーかつ学年混合で学習をしていました。また、授業中には2人の生徒に1人の教師がつく形で、手厚いサポートが行われていました。それらの形態は、個人に合わせた最適な学びにつながるため、生徒の能力が、授業を通し、最大限引き延ばされている様子が見て取れました。

2つ目は、教師の方々の生徒への対応や、教師の方々同士での連携の取り方について、参考になったということです。私は、これまで特別支援学校に通う、障害を持った生徒と関わる機会がなかったため、正しい関わり方を知りませんでした。そのため、実習1日目は、教師の方々の言動に注目し、参考にしながら、生徒と関わりを持ってみようという意識で、活動を行っていました。すると、生徒の得意苦手、好き嫌い、問題視すべき行動について、担任全員が把握しており、それらに合わせた指導やサポートが行われていることに気づきました。具体的には、個別学習の時間の課題の設定を一人ひとりの学習進度に合わせてたり、生徒の発達過程や体調に合わせて、給食を細かく切ったり、量を調整したりすることです。授業中はもちろん、授業外での声掛けも、生徒の特性に合わせて行われていることに驚きました。そして、各生徒の情報を細部まで把握しているからこそ、どこまで手助けをするのか、注意をするのかというバランスが取れるということが分かりました。

このように、特別支援学校での介護等体験を通し、特別支援学校に関する知識や障害を持った生徒への対応など、様々な学びを得ることができました。特に、教師の方々の生徒に対する対応力や視野の広さは、一般学校でも生かすことができると思います。そのため、今回の学びを、今後の生徒との関わりの中で、生かしていきたいと考えています。実習で世話になった先生方のように、生徒一人ひとりと真剣に向き合い、個人を尊重しながら適切なサポートを行うことで、能力を引き延ばすことができる、そんな教師になりたいと思いました。

介護等体験の感想とまとめ

総合子ども学科 有川 可奈恵

私は、介護等体験で高校3年生のクラスに参加させていただきました。9人クラスで担当教員は3人でした。最初は、高校3年生で女子生徒が1人しかいなかったということもあり、コミュニケーションを自分からとることを躊躇してしまいました。しかし、生徒からコミュニケーションをとってくれることもあり、最終的には楽しく体験を終えることができました。私が参加させていただいたクラスは生徒同士はもちろん、生徒と先生の関係性もとても良かったです。学校全体がそのような雰囲気でした。これも、大切な支援の一貫なのかなと感じました。

私が体験させていただいた学校は知的障害をもつ生徒が通う学校で、体験する中で自閉症などの生徒だと特に、信頼関係を築かないとコミュニケーションをとることは難しいと感じたためです。このような素敵な環境の中で生徒との関わり方を学ぶことができました。例えば、メリハリをつけることや根気強く接すること、素早く対応することです。先生方は、生徒と関わっていくなかで、できていないことははっきり指摘されていました。既に信頼関係が築かれていることもあり、全く気をつかう様子もありませんでした。しかし、できたことがあれば、言葉に出してはっきり褒めていました。知的障害をもつ生徒だと、支援のいらない生徒が雰囲気や仕草などで感じとることができる部分も、察することが難しいからかなと思いました。また、生徒さんのなかには何回も同じことを聞いてきたりする方がいたり、指示したことをしない方がいました。それでも、根気強く答えたり、同じ指示を繰り返したりされていました。その姿を見て、尊敬の念が深まりました。そして、素早い対応にも尊敬の念を抱きました。1日目にホームルームの授業で洗車をしました。それは、その時間内にその日することを決め、すぐに実行しました。しかし、洗う車や道具の用意もすぐに整えられていました。また、1日目の給食の際、女子生徒が発作を起こしてしまったのですが、素早く対処をされていました。その女子生徒は学校では初めて発作を起こしたらしく、さらに先生方の対処の素早さに驚きました。障害を持っていることで予想がつかないことも多いけど、安全に過ごすためには素早い対応が求められるのかなと感じました。

私はこの体験で様々なことを学びましたが、特に得ることができたと思うことは、障害をもつ方への慣れです。今まで障害をもつ方と関わる機会は少なく、あっても軽度だったため、健常者と特に変わりのない方ばかりでした。しかし、今回2日間過ごして少しだけ障害をもつ方への理解を深められたと思います。そのため、コミュニケーションをとろうという気持ちや、もっと理解を深めたいという気持ちがわくようになりました。このことは、教員になった時はもちろん、そうでなくてもこれからどんどん広がっていくコミュニティのなかで増えるであろう障害をもつ方と出会った時に生かしていこうと思いました。

1-4. 各種体験記（医療栄養学科-栄養教諭課程）

栄養教育実習 感想文

医療栄養学科 古谷 百花

5日間の栄養教育実習を通して、授業観察や食に関する指導をおこない、小学校の教育におけるさまざまな工夫や子どもたちとの関わり方について学ぶことができました。

まず、授業観察において最も印象に残ったことは、先生方の柔軟かつ工夫された指導方法です。先生は授業の進行にあたり、生徒一人一人のペースに合わせて指導をおこない、必要に応じて質問を投げかけたり、グループワークを取り入れたりして、子どもたちの集中力を引き出していました。

次に、食に関する指導についてです。私は、食事のマナーに関する指導を2年生におこないました。1回目の授業では、時間内に授業を終わらせることに精一杯で、子どもたちの集中力が続かず、授業への関心が薄れていく子も見られました。この反省点を踏まえて2回目以降の授業方法を見直しました。具体的には、授業の中にグループワークを取り入れて、生徒が積極的に参加できる時間を増やしました。最後の授業では、授業の流れがスムーズになり、生徒たちが集中して食事のマナーを学べたことに達成感を感じました。

さらに、給食が「生きた教材」として、子どもたちに栄養の大切さを伝えるだけでなく、食事を通じて礼儀や感謝の心、社会性を育てる機会であることを強く感じました。実際に、子どもたちは食事を通して「いただきます」「ごちそうさまでした」といった挨拶を大切にしており、食事が単なる栄養補給の場ではなく、人間関係や社会的なスキルを学ぶ場所であることに改めて気づくことができました。

この実習を通じて、5日間という短い期間の中で多くのことを学び、たくさんの方々との関わりをもつことができました。初めは緊張していましたが、授業をおこなっていく中で生徒一人一人と向き合い、クラスの雰囲気に応じて臨機応変に対応できる力をつけることができたと感じます。また、実習先の先生方からは多くの指導と助言をいただき、改めて感謝の気持ちでいっぱいです。この5日間で得た経験をこれからは活かしていきたいと思いません。

私の目指す養護教諭像～養護実習での経験を通して

看護学科 古野 ひなた

私は、子どもたちみんなが安心して頼ることのできる養護教諭になりたいと考える。

これまでの大学教職課程の授業や実習を通して、自分のなりたい養護教諭像というものが見えてきた。特に、4年次の養護実習での学びは非常に大きかった。そのため今回は、養護実習での学びを軸に、自分の目指す養護教諭像について述べていく。

教育実習では、「わかっていること」と「実践できること」は違うのだということについて体験を通して学ぶことができた。例えば、一度にたくさん来室した児童への対応で、重症度を素早く判断して優先順位をつけることや、付き添いの児童は一度保健室の外に出して混乱しないようにすることなど、大学の講義で一度は理解していたはずなのに、いざ現場でそのような状況になったときには、何から手をつければ良いのかわからず困ってしまった場面があった。他にも、給食後の食物アレルギーを疑う症状が出現した児童への対応や、病院に連れて行く必要のあるけがをした児童への対応など、緊急時の対応が実習中に遭遇したのだが、それらに関しても、事前に対応方法は学んでいても実際にその状況下ではなかなか自発的に動くことができなかった。このような様々な場面に出会うことや様々な児童に出会うことが、私の養護教諭としての経験値を上げることに繋がったと振り返ってみて感じる。また、養護教諭は個別の児童や保護者の対応のみならず、集団を見ていく必要がある。実習中は、毎日の健康観察簿の集計や保健だよりの作成、保健学習の授業実施などでその側面を学んできた。特に、保健学習の授業に関しては、実施する何日も前から教科書を読み込んだり、活動と説明のバランスを考えたりと考えることが非常に多く、学級によっても雰囲気は違うため、普段からの様子を知り、伝え方を変える必要があることも学んだ。教職員間の情報共有や周辺機関との連携、保護者との連携も、実際に近くで見て平常時から各方面と活発に話し合いをしておくことや情報共有をしておくことが非常に大切な養護教諭の役割の1つであることを理解することができた。

以上のように、私は大学の中で学んできたことを活かしながらも、実習として実際の現場に出たときの違いにもたくさん気づきながら、4年間の教職科目を自発的に楽しんで学ぶことができたと思う。

養護教諭課程を履修し始めた当初は、ただ漠然と「子どもが好き」「将来の選択肢を増やしたい」といった思いを持っていた。4年間の学習を終えた現在は、より子どもが好きになり、新たに「自分が関わることによって子どもたちにとって安心できる存在になりたい」という思いが芽生えた。自分自身の強みとして、子どもとの距離感をつかむのが得意なところ、同じ目線に立って話をすることができる場所があり、それは実習先でも評価してもらうことができた。実習の最終週にあった校外学習での外遊びの時間に、体調が悪いことやけがをしたことを1番に私に伝えてくれた児童が何人もいた。4週間の中で、児童たちの私に対する認識が「教育実習の人」ではなく「保健室の先生」として少し変わったことが嬉しく感じた。児童がどこか体調が悪かったり、悩んだりしているときに、その強みを活かすことで、児童にとっての安心感につなげることができるのではないかと考える。一方で、自己の課題として感じたのは、集団に対しての目の向け方や指導の方法についてである。実習の中では、保健学習の授業づくりやクラスの雰囲気によって反応が違うことに戸惑った。これに関しては、普段からの学級の状況を観察することや、普段から授業をしている担任の先生にわからないことを聞くことが有効なのではないかと指導の養護

教諭の先生から教えていただいた。養護教諭のみならず、看護師であってもわからないことや苦手とすることを聞くことは必要な力になると助言を受けて感じたため、これからの私自身の課題として克服できるように努力を重ねていきたい。

さいごに、4年間の教職課程の学習は私にとって非常に興味深く、楽しいものだった。振り返ってみても、同じ養護教諭を目指す仲間との出会い、様々な経験をすることができた実習校での職員の皆さんや児童たちとの出会いがあり、良い思い出が多数でき、履修し続けて本当に良かったと感じている。私は、卒業後は看護師として社会に出ることになっているが、学校で養護実習生として見てきた子どもの生活実態は、医療現場でも活かすことができると思っている。そして、いつかは「子どもたちにみんなが安心して頼ることができる養護教諭」として学校現場で活躍できるように、社会に出ても精進していきたいと考えている。

私の目指す養護教諭像～養護実習の経験から

看護学科 山岡 美夢

はじめに

私の目指す養護教諭像は、児童生徒一人一人に寄り添い、怪我や風邪などの身体的な健康問題だけでなく、抱えている悩みなどの心の問題にもいち早く気づき、養護教諭として専門的な知識を活用して支えることができる存在である。また、養護教諭だけで問題を解決するのではなく、学級担任や管理職、時には学校医などとも連携し、児童生徒の個別的なニーズに応じた支援を行える養護教諭を目指したいと考える。このような養護教諭を目指すきっかけとなったのは、養護実習やこれまでの講義を通して学び、深く考えた経験であった。以下に、その具体的な内容について述べる。

本論：「児童生徒理解のための養護教諭としての在り方」

私は、児童生徒一人一人に寄り添うことをしていきたいと考える。養護実習で児童生徒対応を通して、私は、児童生徒一人一人に視線を合わせて関わることや、少しずつ距離を近づけることができるように、児童生徒の思いを傾聴するという点を意識した。これらを意識したことにより、最初は少し距離を近づけることが難しかった児童生徒も、別日になるととても距離を近づけて会話することができたため、信頼関係を築くことができたのではないかと考えた。しかし、養護教諭は一人一人との信頼関係を築くことを前提に、その後の処置や支援に繋げていく必要があると考える。そのためには、児童の発言だけではなく、言葉に隠れた心情も読み取ることが必要だと考える。実際、教職実践演習のLGBTsの講義を通して、心の性についてはその児童生徒自身が、心と体の性が異なっているのであれば、仲が良い友人にも相談することは非常に勇気がいるということを知った。そのため、養護教諭として児童生徒のことを少しでも気がかりになっていることがあれば、養護教諭から声掛けを行い、時には児童生徒から相談してくれるように環境を整えるなどをし、一人一人に目を向けられるような寄り添い方をしていきたいと考える。

また、養護実習の中で、緊急事態対応の経験をした。私は、実習の間に、緊急時対応が起こるとは想定していなくマニュアルなどしっかりと確認を行えていなかった。そのため、私は、今何が出来るのか、何をしなければならないのかという点に焦ってしまった。しかし、養護教諭は、医療的な面で専門的な知識を持っている立場でもあるため、児童生徒の対応を的確に行い、その後の病院での治療や処置に繋ぐことができるような対応をする必要がある。実際、養護実習を通して、緊急時対応をした後に、管理職の方から「養護教諭は、冷静な対応をしてくれた。私は、身体のことなど分からないことも多くあり、触ってはいけない場合もあり、自己判断ができないため、養護教諭は本当に助かっている」との話をして下さった。そのため、予めどのような場合が起きてしまっても迅速に対応できるようにあらゆる場面を想定することが重要であると考えた。また、養護教諭は、児童生徒対応だけではなく、他の教職員にもどのようなことをしてほしいのか伝えることも役割だと考える。実際、養護教諭が児童対応で手が離せなかったため、他の教員に保健調査票を持ってきてほしいと養護教諭から要請があった。しかし、その教員は、どこに保健調査票があるのか分からなかった事例があった。そのため、予め連携をとり、どこに何があるのか、マニュアルなども教職員全員が周知できるようにしなければならないと感じた。

また、私の課題は言語化することができないということであると考えた。ケースメソッド教育方法を使った養護教諭課程の専門授業を通して実感した。自分自身は学校全体で共有し、共通理解してから児童や保護者と面談するべきではないかと考えていた事例であった。しかし「学校全体で情報共有することは、意見がまとまらず、家族や本人の対応が遅れてし

まうかもしれない」という他の人の意見もあった。このように、議論を通して、自分自身が考えていたこと同様の意見とは異なる意見に直面した。自分自身の意見を述べることで、自分はどのように考えているのかという気づきにもなり得ることを体験した。養護教諭として児童対応をしていく上では、児童生徒が自分の主訴を述べる事が出来ない可能性もあるため、養護教諭から働きかけを行い、全体をアセスメントしたことに間違いがないかということと言語化し、確認することも重要になると考えた。そのため、養護教諭になる前から、このような事例の場合はどのように考えるのかということや、頭の中だけで考えるのではなく、しっかりと言語化することや、普段からの生活の中からも言語として表現できるように意識していきたい。

おわりに

養護実習やこれまでの大学での講義を通して養護教諭の役割は、保健室を拠点としながら幅広い視野を持って児童生徒を理解すること同時に救急処置や次の支援に繋げていくことだと考えた。そのためには、これまで学んできた連携や声掛けの仕方、タイミングなどもその児童生徒の学年に応じて配慮し、児童生徒が安心することができるような養護教諭になりたいと思っている。

2024年度 養護実習成果発表会 養護実習を終えて

2024年 看護学科4年
山崎あみ

教育実習校の概要

- 実習校
福井県大野市立小学校 1学期 4週間実習
- 児童数
全校児童329名（15学級）
- 学校教育目標
自らをきりひらく子

「一生懸命がかっこいい」
という合言葉のもと
元気いっぱい何事にも
全力で取り組む児童



保健室の様子

- ・来室者が多く、休み時間にはぎやかな様子
- ・怪我、病気以外にも精神的ケアをもとめて来室する児童が多い



主な実践内容

- ・保健室での児童対応
- ・保健指導（6歳臼歯について）
- ・掲示物づくり（生活リズムについて）
- ・保健だよりの作成（熱中症、むし歯について）
- ・定期健康診断（学校医内科検診、歯科検診、心臓検診、眼科検診、身長・体重・視力・聴力測定）
- ・欠席児童の確認、出欠簿の回収、健康観察集計
- ・学校環境衛生検査（水質検査）



など



「先生！ちゃんと王さまがいたよ！」と報告してくれる児童が多かった

保健指導

- ・学級：2年1組
- ・テーマ：「は」の王さまをまもろう
- ・目的：6歳臼歯の特徴を知る、6歳臼歯の磨き方を理解する
- ・使用したもの：黒板、パワーポイント、歯の模型がついた人形、大型歯ブラシ

保健指導



○工夫したこと

- ・黒板、パワーポイントは情報量を少なくし、見やすくした
- ・黒板だけでなく、パワーポイントを使うことで切り替えができ集中力が続くようにした
- ・児童にたくさん問いかけ考えさせる

○気づいたこと

- ・授業見学をして、雰囲気を読むことで展開を考えやすい
- ・児童全員の名前を覚えることで信頼関係を築くことができ授業に関心を持つ
- ・準備をしっかりとしておくことでスムーズに授業を進めることができる



学校における感染予防対策とその工夫から学んだこと

- ・1学年（2クラス）に1つ感染対策用のごみ箱（鼻水、唾液）を設置し区別していること
- ・「感染症情報システム」に欠席者の人数や理由を記録し、県内、市内の児童生徒の感染症の人数が分かるようなシステムが構築されていること
- ・毎日清潔なハンカチを持参するように一人ひとり指導し、健康観察時にチェックを行っていること

保健室での実習で学んだこと

・主訴だけに目を向けない

頭痛や腹痛の主訴で来室したが顔色や表情は良好

→ほかの理由があるかもしれない（心と身体は繋がっている）ため、話を聞いたりその児童との時間をしっかり作る

・適度な距離感を保つ

保健室が居心地の良い場所となることはとても良いこと

→1番は児童が教室で苦痛なく過ごせることであるため、受容も大事であるが時には背中を押してあげる

養護教諭を目指す人・後輩に 伝えたいこと

看護学科の勉強と教職課程（養護教諭）の勉強を両立することは大変かと思いますが、今勉強していることは看護にも養護教諭にも生かすことができ、無駄なことは1つもありません。

看護とは違った学びや経験を得ることができ、児童と関わることの楽しさを体感することができる貴重な機会にもなると思うので頑張ってください！！